八木秋子と『夢の落葉を』

阿部浪子

信濃ジャーナル
1979.2

昨春、八木秋子さんの初の著作集『近代の〈負〉を背負う女』が上梓された。

その出版記念会が四月下旬におこなわれたが、お祝いにかけつけた人たちのスピーチはほとんど、八木さんの誠実で、きびしい人となりをたたえるものであった。

また、それとはちがう角度から、五十がらみの男性が、八木秋子には文体がある、といった言葉が、私にはとくに感銘ふかかった。彼は、八木さんの著作集と個人通信〈あるはなく〉の印刷をひきうけている印刷屋の主人だそうだが、まことに鋭い意見だ、とおもう。八木さん自身も、この言葉がたいそう気にいったようすであった。

その後、新聞紙上に、『近代の〈負〉を背負う女』と八木秋子を紹介する文章がかかげられたが、それらは、著者が、昭和初期にアナキストとして長野県下の農村青年のコムミュン運動に身を挺したこと、八十三歳の現在もなお己れを〈燃焼し続ける女〉であること、〈波乱に満ちた自立への闘い〉を一貫しようとすることなどを、高く評価するものであった。

もちろん、こういう評価に私も賛成である。

〝別に弁護する気にもならない。怒る気にもならない。こういうふうに生きてゆくより仕方がなかった。生きるすべをほかに知らなかったのだ。それで一応いいと思ってやってきたんですもの……〟

八木さんは、このように、みずからの、〈闘いに明けくれた〉すぎこしかたを回想する。彼女の長い長い人生を要約すれば、このたび刊行された二番目の著作集『夢の落葉を』へ推せんのことばをよせた埴谷雄高氏のいうとおり、〈酷しい自立の道〉のひとことにつきるであろう。そのかけがえのない人生の軌跡に惹かれないわけはない。充分に魅力的だ。

しかし、それよりも私をつよく把えるのは、彼女がいまもなお文章を書きつづけている、ということである。

私が、東京都の養育院に住む八木さんを訪ねたのはおととしのことだから、彼女のわかい友人にさせていただいてから、まだ日は浅い。彼女と同郷の平林たい子のことが知りたくてお会いしたのが、そもそものきっかけである。しかし、八木さんには、平林さんは五十年の作家的生涯をまっとうしたところがエライわね、ということぐらいでたい子との直接の想い出はない、とわかってからも、私は八木さんをたびたび訪ねることになった。

四人の雑居部屋に、八木さんが畳に腹這いになって、書物をしているすがたを目撃したとき、私はなによりも愕いた。そのかたわらで、三人の老女が昼下りのテレビをぼんやり見ている。私はすぐに八木さんに声がかけられなくて、しばらくその小柄な軀を見つめていると、なぜだかせつなくなってきた。そして、ものを書くことの恐しさと、その執念を見せつけられたように思えたのであった。

また、八木さんが文章を書く人であるためか、彼女の記憶の宝庫からとびでてくるさまざまな想い出が眼にみえるように、いわば描写的にかたられることも、私には注目させられた。

そんなわけで、八木さんと何度かお会いすることになったのである。

八木さんは、昭和三年から五年にかけて、〈女人芸術〉〈黒色戦線〉〈婦人戦線〉などの誌上に、小説や詩や評論を発表し、多彩な才能を発揮した。それらの作品はいま読んでも新鮮な感銘をあたえる。「日本資本主義の鳥瞰」などの評論における〈非凡な洞察力〉、「ウクライナ・コムミュン」「一九二一年の婦人労働祭」などの小説にみられる鮮かなディテールの描写は、江刺昭子さんのいうとおり、〈このまま文芸家としての道を歩めば、異彩を放つ存在になったろう〉ことを、うかがわせるものである。

だが、八木さんは、この後実践運動に参加し、文筆活動から遠ざかったのである。

ところが、一九七六年九月、彼女は長い沈黙から、「マルキスト永島暢子との思い出」を『高群逸枝と「婦人戦線」の人々』に発表した。若いころの華やかさを消したかわりに、生きることの苦渋をにじませたこの作品は、味わい深いもので、彼女ならでは書けぬものであった。また、四十余年、彼女がペンを捨てずに、こつこつと技術的修練を積みかさねてきたことを、明かすべきものであった。

その、いわば精進の過程にこっそり産みおとされていたのが『夢の落葉を』の長篇にほかならない。

『夢の落葉を』は、相京範昭さんの解題（〈あるはなく〉第八号）によれば、一九五八年から一九六二年まで、著者六十三歳から六十七歳にかけて執筆された。足かけ五年の日月を要し、しかも、その間に合わせて三回書きなおされた、という。

したがって、著者がその日記に

祝 信濃ジャーナル創刊30周年
郷土の発展を願い
今日を築き
明日を創造する
土木工事一式
三建建設有限会社
代表取締役 池田三郎
飯田市上虎岩 2131番地
☎(0265)29—8353・8426

1979.2 信濃ジャーナル

〈なんと愛すべきわたしの子供よ〉としるすように、この作品は八木秋子生涯のうちでもっとも手塩にかけたものだ、といえよう。

第一部と第二部にわかれ、全部で四十一の章から構成されている。いずれも、著者の郷里・木曽を舞台にし、そこで過ごした幼年時代の想い出を、こまやかに織りあげたものである。

第一部には、「馬市」「福島の氏神まつり」などが収められ、読者を明治末期の風物・風俗へといざなう。やや冗漫で、通俗的で、きれいごとにすぎる箇所もあるけれど、物中心の現代人が忘れている感覚をよびおこすような、詩的で、素朴で、ユーモアあふれる表現が、随所にみうけられる。

第一部より、むしろ第二部の方がおもしろく、私には読みごたえがあった。その二十五の章はそれぞれ独立しているが、それらを通して読めば、そこにドラマが繰り広げられていることに気づくであろう。〈木曽路はすべて山の中である〉とは、島崎藤村の「夜明け前」の冒頭の一節である。その舞台とおなじように、〈山にあけて山に暮れる。どこを向いても、どちらに歩いても山しかない、永遠の谷間〉に住む一家が登場する。誠実と忍耐をモットーにしながら二十八年間、郡役所という小さな職場をまもりぬいた父親、勝気で反抗的で、事あるごとに、女だてらに生意気な、といって娘たちを叱りとばす母親。そんな両親のもとで七人の兄妹はめざめ、広い広い海が見たいという気持にも似た切実な希いを、将来にいだいて成長してゆく。著者の愛情と念いはここに登場するすべての人間にひとしくこめられている。が、とりわけ近代的な生きかたがしたくて、どれだけあがいたか知れない姉妹の生きかたに、著者の主眼があるのではないか。三人の姉妹のうちでも、三女・三千代のそれがいちばん激しく、せつない。分別くさい人間のたくさんいる日本がいとわしくて、彼女はアメリカへ渡る。そのとき彼女の採った手段は、見も知らぬ移民男性に求婚して渡米する、というものであった。こういう向う見ずな態度は情熱的ではあるが、理論的ではないように思う。しかし、彼女の、社会への抵抗の精神は、著者の生きかたを投影するものでもあり、私にも理解できる。

また、可れんな五女スエが盗人のところに盗られた品物をとり返しに行く挿話も、なかなか愉しい。彼女の一途なすがたは感動的だ。

ほかに長女、次女、四女が登場するが、それぞれ個性的に描かれていて、今日の女性にいくつかの問題を提出している。

さて、先日、私は八木さんをたずね、この作品をかいた動機について質問してみた。〝それまで硬いものを書いてきたので、今度は淡々とかいてみたかった。そしていつまでも書き継いでゆくためにあいう素材をえらび、文章も平易にした。幼年時代を回想することによって、どうこういう特別な意図はなかった。とにかく、自分の持っている資質がだせればいいと思ったのです。〟

と八木さんは答える。淡々と書いたものが、ひとつには人の生きかたを追求したものになったことは、先にかくとおりである。

八木さんは、この作品を、浮浪者や引揚者を収容する母子寮につとめているとき、多忙な日課のあいまをぬって、少しずつ書きためていた。母子寮に住むいわゆる底辺の人たちとの接触を通じて彼女が得たものは、作品のなかに反映しているはずだ。著者が登場人物を上から見下すのではなく、いとおしみ、暖かさ、共感をもって描くその視点こそ、それを反映したものではないだろうか。

八木さんは、この作品執筆後もかきつづけてきた。彼女にとって書くとはなにか。

〝書くことは自分にとって生きる支えであった。それがあるからこそ、生きてきたのだ〟と八木さんはしみじみ回顧する。男児を夫のもとにおいて家を出たあとも、実践運動に挫折したあとも、彼女は、文字をきざむことで自己省察し、悲惨な境涯から脱け出ようとした。言い換えれば、〈酷しい自立の道〉を歩んできたその背後で八木さんを支えてきたものは、書く、という行為にほかならなかった。その行為をとおして、〝肉体的な苦痛だった〟という子捨てへの苛責も、〝女だけが苦労した〟という実践運動でうけた屈辱も、彼女の内部ではすでに客観化されているのではないだろうか。

つまり、八木さんの作品は、生活の現場のなかで、内面から衝きあげてくる人間的な要求を、自分の言葉で表わしたものであり、そこに、印刷屋の主人がいみじくも語った八木秋子の文体が存すると、私はおもう。

彼女はおそらく、〈死ぬまで不安と動揺を引きず〉りながら、文章を書き続けてゆくにちがいない。

『近代の〈負〉を背負う女』『夢の落葉を』はいずれもJCA出版から刊行。その住所は、東京都千代田区神田神保町一―四二日東ビル一階。

（新座市）

オーメン2
DAMIEN OMEN II
6月6日6時生まれ
あの忌まわしい運命の子
〈ダミアン〉いま13才――
更に凄まじい恐怖と共に
帰って来た！
〈カラー作品〉
ウィリアム・ホールデン☆リー・グラント
ジョナサン・スコット＝テイラー☆監督ドン・テイラー

思春の森は危険な恋
思春の森は3人だけの秘密
〈カラー作品〉
思春の森
ララ・ウェンデル
＋マルティン・レーブ
＋エヴァ・イヨネスコ
2月9日よりロードショウ
松本中劇
☎32－0834